# 大空（生徒・保護者向け）５５号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校　校長通信

令和3年12月9日（木）


## サンタに託す夢―祈りの意味―

### □本日の概要

１　努力の伴わない夢はない。夢を運んでくるのは自分自身である。まずはふさわしい夢を持ち、その達成を祈ってほしい。
２　祈りは他者の幸福を願うことであり、夢の達成のために、神に対して、自分が努力することの決意表明である。自分の夢の達成を祈ってほしい。
３　センター試験で受検生が涙したという伝説の問題を読んでみよう。奇跡が皆さんにも起きるかもしれない。
４　本日のＮＦＣ　感性　想像力　行動力

### □「祈り」とは何か

１２月はクリスマスや年末年始の休み、お正月と、何となく楽しくなる季節です。もちろん、共通テスト等を控えた高校３年生の皆さんは、最後の追い込みや体調管理で、とても楽しいという気分ではないかもしれません。クリスマスはキリスト教の祝祭日ですが、宗教と関係なく、何かを信じたり、祈ったりすることが身近に感じられる行事でもあります。

たしかに、私たちを取り巻く現実には厳しいものがあります。特に皆さんは、高度経済成長や、バブルで浮かれていた大人たちより、ずっとずっと厳しい時代を生きており、さらにコロナが追い打ちをかけています。今の若者は大変だと思いますが、だからと言って、何も信じられないとか、夢の持てない人にはなって欲しくありませんし、自分が夢の持てないことを、人や時代のせいにする人になって欲しくはありません。

努力の伴わない夢はありません。夢は誰も運んできてくれません。サンタは君自身なのです。日常のささやかな努力の積み重ねが、君に何かをもたらしてくれる筈です。努力するにふさわしい夢を持ってください。そして、その達成を祈ってみましょう。

祈りは、究極のプラス言葉で、美しい言葉です。脳科学的にも、「祈り」は人間から未知なる力を引き出すことが分かっています。（マイナスの祈りは「呪い」といい、逆に必ず自分を不幸にします。）「Merry Christmas!メリー・クリスマス」は「I wish you a merry Christmas!」の略で、「私はあなたに楽しいクリスマスを祈ります」という、相手に祝福を投げかける言葉です。年の瀬の、「良いお年を」という慣用句も、「良いお年をお過ごし下さい」という相手の祝福です。

つまり、祈りは、「宝くじがあたりますように」などという無責任なものではありません。他者の幸福を願うものであり、神に対する契約、決意表明です。「今年が良い年でありますように」という祈りは、本来は決して受動的なものではなく、「今年が、皆や私にとって良い年でありますように、私は神に誓って努力します」という言挙げ、つまり契約なのです。「神頼み」というと無責任なイメージがありますが、本来は神に祈ることは、無責任ではなく、自分の決意を神に示し、契約をすることなのですね。だから、いい加減なことをいうとバチがあたります。

自分の夢の達成を、声高らかに祈ってみませんか。

### □伝説のセンター試験国語問題の紹介

まだ早いですが、ささやかなクリスマスプレゼントです。

２００１年のことですが、当時のセンター試験の「国語Ⅰ」の小説の問題に、江國香織さんの小説「デューク」全文が問題文として出題されたことがあります。（当時の国語の試験は、「国語Ⅰ」と「国語Ⅰ・Ⅱ」という区分があり、「国語Ⅰ」は少し基礎的な試験です。）一般的に国語の小説の問題というと、長い小説の一部が切り取られて問題に改編されるものですが、これは短編小説の最初から最後までノーカットで出題されたという珍しい問題です。事実かどうかは分かりませんが、試験中に読みふけってしまい、涙を流す受験生がいたという伝説があります。（設問は紙面の都合で１問だけ掲載しました。）クリスマスの奇跡が、あなたにも訪れるかことを祈っています。

**○次の小説は江國香織の小説「デューク」の全文である。これを読んで後の問いに答えよ。**

歩きながら、私は涙がとまらなかった。二十一にもなった女が、びょおびょお泣きながら歩いているのだから、他の人たちがいぶかしげに私を見たのも、無理のないことだった。それでも、私は泣きやむことができなかった。

デュークが死んだ。

私のデュークが死んでしまった。

私は悲しみでいっぱいだった。

デュークは、グレーの目をしたクリーム色のムク毛の犬で、プーリー種という牧羊犬だった。わが家にやってきた時には、まだ生まれたばかりの赤んぼうで、廊下を走ると手足がすべってぺたんとひらき、すーっとお腹ですべってしまった。それがかわいくて、名前を呼んでは何度も廊下を走らせた。（そのかっこうがモップに似ていると言って、みんなで笑った。）たまご料理と、アイスクリームと、梨が大好物だった。五月生まれのせいか、デュークは初夏がよく似合った。新緑のころに散歩につれていくと、匂やかな風に、毛をそよがせて目をほそめる。すぐにすねるたちで、すねた横顔は(注1)ジェームス・ディーンに似ていた。音楽が好きで、私がピアノをひくと、いつもうずくまって聴いていた。そうして、デュークはとても、キスがうまかった。

死因は老衰で、私がアルバイトから帰ると、まだかすかにあたたかかった。ひざに頭をのせてなでているうちに、いつのまにか固くなって、つめたくなってしまった。デュークが死んだ。

次の日も、私はアルバイトに行かなければならなかった。玄関で、みょうに明るい声で〝行ってきます〟を言い、表にでてドアをしめたとたんに涙があふれたのだった。泣けて、泣けて、泣きながら駅まで歩き、泣きながら改札口で定期を見せて、泣きながらホームに立って、泣きながら電車に乗った。電車はいつものとおり混んでいて、かばんをかかえた女学生や、似たようなコートを着たおつとめ人たちが、ひっきりなしにしゃくりあげている私を遠慮会釈なくじろじろ見つめた。

「どうぞ」

無愛想にぼそっと言って、男の子が席をゆずってくれた。十九歳くらいだろうか、白いポロシャツに紺のセーターを着た、ハンサムな少年だった。

「ありがとう」

蚊のなくような涙声でようやく一言お礼を言って、私は座席にこしかけた。少年は私の前に立ち、私の泣き顔をじっと見ている。深い目の色だった。私は少年の視線にいすくめられて、なんだか動けないような気がした。そして、いつのまにか泣きやんでいた。

私のおりた駅で少年もおり、私の乗りかえた電車に少年も乗り、終点の渋谷までずっといっしょだった。どうしたの、

とも、だいじょうぶ、とも聞かなかったけれど、少年はずっと私のそばにいて、満員電車の雑踏から、さりげなく私をかばってくれていた。少しずつ、私は気持ちがおちついてきた。
「コーヒーごちそうさせて」
　電車からおりると、私は少年に言った。
　十二月の街は、あわただしく人が往き来し、からっ風がふいていた。クリスマスまでまだ二週間もあるのに、あちこちにツリーや天使がかざられ、ビルには歳末大売り出しのたれまくがかかっていた。喫茶店に入ると、少年はメニューをちらっと見て、
「朝ごはん、まだなんだ。オムレツもたのんでいい」
ときいた。私が、どうぞ、とこたえると、うれしそうにこっと笑った。
　公衆電話からアルバイト先に電話をして、風邪をひいたので休ませていただきます、と言ったのを聞いていたとみえて、私がテーブルにもどると、
「じゃあ、きょうは一日ひまなんだ」
　少年はぶっきらぼうに言った。
　喫茶店をでると、私たちは坂をのぼった。坂の上にいいところがある、と少年が言ったのだ。
「ここ」
　彼が指さしたのは、プールだった。
「じょうだんじゃないわ。この寒いのに」
「温水だから平気だよ」
「水着持ってないもの」
「買えばいい」
　自慢ではないけれど、私は泳げない。
「いやよ、プールなんて」
「泳げないの」
　少年がさもおかしそうな目をしたので、私はしゃくになり、だまったまま財布から三百円だして、入場券を買ってしまった。
　十二月の、しかも朝っぱらからプールに入るような酔狂は、私たちのほか誰もいなかった。おかげで、そのひろびろとしたプールを二人で独占してしまえた。少年はきびきびと準備体操をすませて、しなやかに水にとびこんだ。彼は、魚のようにじょうずに泳いだ。プールの人工的な青も、(注２)カルキの匂いも、反響する水音も、私にはとてもなつかしかった。プールなど、いったい何年ぶりだろう。ゆっくり水に入ると、からだがゆらゆらして見える。
　とつぜんぐんっと前にひっぱられ、ほとんどころぶようにうつぶせになって、私は前に進んでいた。まるで、誰かが私の頭を糸でひっぱってでもいるように、私はどんどん泳いでいた。すっと、糸をひく力が弱まった。あわてて立ちあがって顔をふくと、もうプールのまんなかだった。三メートルほど先に少年が立っていて、私の顔を見てにっこり笑った。私は、泳ぐって、気持ちのいいことだったんだな、と思った。
　少年も私も、ひとことも言わずに泳ぎまわり、少年が、
「あがろうか」
と言った時には、壁の時計はお昼をさしていた。
　プールをでると、私たちはアイスクリームを買って、食べながら歩いた。泳いだあとの疲れもここちよく、アイスクリームのあまさは、舌にうれしかった。このあたりは、少し歩くと閑静な住宅地で、駅のまわりの喧騒がうそのようだった。私の横を歩いている少年は背が高く、端正な顔立ちで、私は思わずドキドキしてしまった。晴れたま昼の、冬の匂いがした。
　地下鉄に乗って、私たちは銀座にでた。今度は私が、〝いいところ〟を教えてあげる番だった。裏通りを十五分も歩くと、小さな美術館がある。めだたないけれどこぢんまりとした、いい美術館だった。私たちはそこで、まず中世イタリアの宗教画を見た。それから、古いインドの(注３)細密画を見た。一枚一枚、たんねんに見た。
「これ、好きだなぁ」
　少年がそう言ったのは、くすんだ緑色の、象と木ばかりをモチーフにした細密画だった。
「古代インドはいつも初夏だったような気がする」
「ロマンチストなのね」
　私が言うと、少年はてれたように笑った。
　美術館をでて、私たちは落語を聴きにいった。たまたま演芸場の前を通って、少年が落語を好きだと言ったからなのだが、いざ中に入ると、私はだんだんゆううつになってしまった。
　デュークも、落語が好きだったのだ。夜中に目がさめて下におりた時、消したはずのテレビがついていて、デュークがちょこんとすわって落語を見ていた。父も、母も、妹も信じなかったけれど、ほんとうに見ていたのだ。
　デュークが死んで、悲しくて、悲しくて、息もできないほどだったのに、知らない男の子とお茶をのんで、プールに行って、散歩をして、美術館をみて、落語を聴いて、私はいったい何をしているのだろう。
　だしものは、〝大工しらべ〟だった。少年は時々、おもしろそうにくすくす笑ったけれど、私はけっきょく一度も笑えなかった。それどころか、だんだん心が重くなり、落語が終わって、大通りまで歩いたころには、もうすっかり、悲しみがもどってきていた。
　デュークはもういない。
　デュークがいなくなってしまった。
　大通りにはクリスマスソングが流れ、うす青いタ暮れに、ネオンがぽつぽつつきはじめていた。
「今年ももう終わるなぁ」
　少年が言った。
「そうね」
「来年はまた新しい年だね」
「そうね」
「今までずっと、僕は楽しかったよ」
「そう。私もよ」
　下をむいたまま私が言うと、少年は私のあごをそっともちあげた。
「今までずっと、だよ」
　なつかしい、深い目が私を見つめた。そして、少年は私にキスをした。
　私があんなにおどろいたのは、彼がキスをしたからではなく、彼のキスがあまりにもデュークのキスに似ていたからだった。ぼうぜんとして声もだせずにいる私に、少年が言った。
「僕もとても、愛していたよ」
　淋しそうに笑った顔が、ジェームス・ディーンによく似ていた。
D「それだけ言いにきたんだ。じゃあね。元気で」
　そう言うと、青信号の点滅している横断歩道にすばやくとびだし、少年は駆けていってしまった。
　私はそこに立ちつくし、いつまでもクリスマスソングを聴いていた。銀座に、ゆっくりと夜がはじまっていた。
(注) 1　ジェームス・ディーン―アメリカの映画俳優(1931～1955)。2　カルキ―「クロルカルキ」の略。水の消毒などに用いる薬剤。3　細密画――細かい描写で精密に対象を描いた絵。

問５　傍線部D「それだけ言いにきたんだ。じゃあね。元気で」とあるが、この発言から読みとれる「少年」の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。
①　「私」を慰め切れなかったことを悔やみながらも、一日つきあってくれたことに感謝する気持ち。
②　最後にまたふさぎこんでしまった「私」に対して、あきらめかけながらなおも励まそうとする優しい気持ち。
③　「私」とともに過ごした幸福な歳月を懐かしみ、「私」の深い悲しみにこたえようとする惜別の気持ち。
④　「とっておきの場所」を教え合って心が通じたことを喜び、また「私」に会えるだろうという期待の気持ち。
⑤　一日のデートを通して二人の思い出をたどったことで、「私」への愛着を断ち切ろうとするあきらめの気持ち。

※出典2001年センター試験「国語Ⅰ」